

政治体系論の基本的性格について

山
川
雄
巳

- 一 政治体系論とはなにか
- 二 システム論の基本的な思考法
- 三 政治体系論の展開過程
- 四 問題点と将来

政治体系論とはなにか。それはどのような理論的特質と論理を有するか。それは理論史的に、どのような基盤から成立し、どのような方向に発展しつつあるか。本稿は、これらの諸問題に反省を加え、この理論の発展のために、現在の時点において戦略的見通しをつけることを目的とする。^{*}

^{*} 本稿は、関西政治思想研究会（一九六六年五月二日、関西学院大学）における筆者の報告要旨に加筆したものである。討論において有益な示唆を与えられた多数の出席者諸氏に感謝の意を表す。なお本文中の括弧入註については、本稿末尾の文献目録を参照されたい。

筆者の見解のヨリ積極的な展開は、拙著『政治体系理論』（有信堂・近刊）で試みられている。参照していただければ幸いである。

一 政治体系論とはなにか

政治体系論は、一九五〇年代以降、主として米国で開発されつつある政治学における新しい理論領域である。それは現在までのところ、まだ明確な理論体系を形成するにいたっていない。その基礎理論的部分についても、かならずしも論理的に明確な一般的定式化が達成され承認されているというわけではない。それが取扱うべき特殊問題とその解法についてはいうまでもない。それゆえ、政治体系論とはなにか、という問に答えることも容易ではない。要するに、政治体系論は、イーストンらによる提唱後一三年間をへた今日でも、まだ学問的に完全にはテイク・オフするにいたっていないのである。ということとはしかし、この理論領域が、とりとめのない、たんなるアイディアの段階にとどまっていた、と主張しようとしているのだと解されてはならない。事態はむしろ逆である。イーストン自身を驚ろかすくらいに、政治体系論に対する反響と支持は大きかったし、この領域への多数の理論的寄与が積みかさねられてきたのである。もっとも、それらは、政治学各分科での政治体系概念の適用を主たる目的とするものであって、かな

らずしも一般理論としての政治体系理論の本質と主要内容を明確化するような累積の仕方をしなかったように思われる。一般理論性についての自覚が最も徹底しているイーストンの場合ですら、ごく最近のかれの著作に照すとき、この理論の内包についての展開はまだ不十分である、とわたくしには思われる。政治体系論はある程度内容的に充実して、いまや一つの限界点に達しているように思われる。すなわち、政治体系論は、それが、たんなる全体性の観点の強調にとどまるものではなく、また政治学概論にすぎないものでもなく、さらに政治の総合理論一般でもないとするならば、その理論的本質について、あらためて徹底的な反省を加え、飛躍をはかるべきときがきている、と考えられるのである。

政治体系論成立の直接の原因は、もちろん一九五〇年代初期のアメリカ政治学の状態とそれに対する政治学者の主体的応答に求められる。第一次大戦以後のアメリカ政治学は、一九五〇年代までに、それ自体の内部で専門的分化を進行させるとともに、隣接諸科学の方法や成果を吸収しつつ、科学的体系化の前提条件としての経験的知識の巨大な蓄積をもつにいたっていた。しかし、たんなる経験的知識と科学的理論とは全く異なるものである。データを理論に転化するためには概念的解釈と説明の論理が必要である。しかし、当時のアメリカ政治学は、これらの経験的データを理論的に消化しうる能力のある総合的かつ統一的概念体系をもちあわせていなかった。政治体系理論の必要性を提唱したイーストンの場合、決定的であったのは、当時の政治学が全体として理論的体系性をもっていない、したがって「調査研究を指導することができ、一見ばらばらなさまざまな種類の調査研究に意味を与えこれらを統一することのできる仮説体系」が存在しないということであった(Easton, 1963; 山川・一九六三)。このような概念的枠組は、政治学の全分科をカバーする広ゲージの理論、すなわち体系理論(systematic theory)となるはずである。ある学

問領域の学問的水準の尺度になるのは、その領域での体系的理論の存否である。イーストンの判断によれば、政治学の進歩のためには、このような体系的一般理論または一般理論の体系を自覚的に発達させ、その枠組のもとに政治学各分科における実証的理論的研究を組織し統合することが必要であり、また適当である。かれは、この政治の体系的一般理論のことを「政治体系」(the political system)と名づけたのである。それゆえ、かれの場合、体系はもとと理論体系の意味であって、政治体系理論(theory of political system)といえは、やや説明過剰ということになる。この意味では、政治体系は、政治学体系にきわめて近いものとされていたといわなければならない。しかし、かれのいう政治体系は、仮説・演繹的性格をもっており、さらに全体として検証に服する理論的模型とされている。したがって、たんなる特殊理論のよせ集めではないし、また総合理論でもなく、体系的一般理論という特殊な形態における政治学体系ともいうべき性質のものであるということになる。それゆえかれは、理論体系と区別される対象論的カテゴリーとしても政治体系という術語を使用するのである。しかし、政治の体系的一般理論ということであれば、自然権理論、権力理論、過程理論、構造理論などいろいろの道があるはずである。体系概念を政治学にこと新しく導入することにはもっと重要な意味があった。すなわちこの当時のイーストンが「政治体系」の手がかりとしているT・P・イーストンの社会体系論にみられるように、「相互に作用しあう要素の複合体」としての動的体系概念に基づいて、政治生活そのものを体系として理解し、その構造と機能の分析を政治学で試みるということである。このような動的体系の思想こそ政治体系論の核心であって、これに着目すれば、政治体系論登場の原因について、もっと広い展望が開けてくる。それは第一に、隣接科学における右のような意味での体系論的アプローチの発展とその影響であり、第二に、これらすべてに影響を与え、これらを生み出している現代社会の基本的動向である。

まず、社会諸科学およびその隣接領域における体系的アプローチのあらわれとしては、たとえば次のようなものがある。(1)ゲシュタルト心理学および集団心理学の発展、(2)B・マリノフスキーらの機能主義的文化人類学、(3)パーソン・ヘンダーソンの社会体系概念とそれを継承したT・パーソンスの社会体系理論と行為の一般理論、(4)H・ヘラーの国家論、(5)経済学におけるW・レオンチェフの投入・産出分析または産業連関論と計量経済学の発展。(6)産業社会学の発展 (Homans, 1950 etc.)、(7)サイバネティクス (Wiener, 1948) (8)一般体系理論 (Bertalanffy, 1948) (9)有機体の哲学 (Whitehead, 1929)。科学の急速な専門的分化そのものが、特定領域における理論体系の建設を試みさせる反面、境界領域の探求や統一科学への試みが体系問題を意識させるのに力があつたことを、これらのうちに読みとることができるであろう。このような理論的状况は、政治学に強い刺激を与えたはずであるが、しかし政治学は体系的・全体的観点の強調ということにおいては、最も後進的であつたのである。それはおそらく、このような強調が、「全体論」(K. R. Popper, 1945; 1957)と全体主義イデオロギーに通じるのではないか、というためらいと無縁ではないであろう。経験科学もイデオロギー闘争の社会的影響からまぬかれることはできないが、とくに政治学はこの点について感じやすい学問領域である。第二次大戦による非合理的全体主義の決定的敗北ののち、社会体系理論と政治体系理論が主として戦勝国アメリカで戦後に発展してきていることは、意味深いことである。体系概念が強調しているのは、いうまでもなく対象の要素的複合性、動的法則性、そしてなにかんづく要素よりも高次の秩序を有する単位の全体性である。その論理は、文脈的思考と体系構成の論理としての弁証法論理であるとわたくしは考える(この点については、近く刊行される拙著『政治体系理論』を参照されたい)。個々の要素的現象を全体に関連させずに、たんに分析するだけでは、それらの事実そのものの意味すら把握できない。全体は要素のたんなる算術和ではない。

そこに体系やその全体的機能の問題が生ずるのである。もっとも、この全体の像は個々の経験的事実の綜合を媒介として獲得されるものであり、それによって実証されるのでなければならぬ。よく知られているようにゲーテは、このような全体像を原像 (Urbild) と呼び、その認識のこゝを見通し (Schaу) とこゝに置く。より現代的な言葉で表現すれば、原像とはヴィジョンである。おそらく総じて体系論は、人間のヴィジョン喪失という根深い世界体験から生じた一つの運動であるといえるであろう。

一般に全体的観点を強調する方法的立場が登場してきた最も深い原因は、現代の社会・経済的状况にあるといつてよいであろう。それは第一に、資本主義経済の変動とそれにもなうイデオロギー状況によつて、「体制」と計画の問題を提起した。第二にそれは、疎外され原子化された個人の社会的存在被拘束性と大衆社会状况の問題によつて、全体的人間の回復の問題をクローズ・アップした。第三に、独占企業体の成立や行政国家化と関連して、個人がのみこまれてゐる巨大社会と巨大組織の問題が提起された。大規模で複雑に発達した内部構造を有する現代組織とその環境との相互作用の問題は、従来の組織論の理論的処理能力をこえる。政治体系論は、この点において他の社会科学諸領域における体系論と共通する課題に直面する。近代政治理論における政治組織の古典的モデルは、合議体としての委員会もしくは議會であつた。官僚制に典型的にみられるように、現代の組織は立体的階層構造をもち、有機的な複雑性を備え、いわば組織の n 乗形態になつてゐるのである。組織の巨大化は、必然的に組織の統合性や組織全体に対する各要素の寄与、公式組織と非公式組織、組織活動の有効性と能率、組織内部での物質・エネルギー・フローおよび情報フローにおける伝達・通信および戦略などの問題を深刻化させる。このような状況は、自然科学をもふくめた諸科学において、組織と組織化に関する一般理論の概念化を刺戟するものであつた。L・v・ベルタランファイの理

論生物学を背景とする一般体系理論の主張は、その典型的な一例であるといえるであろう。これは「相互に作用しあう要素の複合体」としての動的体系に関する一般理論であって、動的体系をその論理的相同性の一般的形式において研究する基礎科学理論である。またN・ウィーナーのサイバネティックス(Wiener, 1948 etc.)は、動物、機械、社会における通信と制御の問題を統一的に扱う科学であるが、それは動的体系の問題を通信工学的な視角と手法によってインターディシプリナリーに統一的に把握することを許すものである。この総合科学も、完成されべきであったものではないが、その基本的主張の妥当性と有効性は、すでに多くの分野で認められ、通信理論・計算機理論・制御理論を基盤とした、システム論の名称で呼ばれている理論領域が急速に発達しつつあるのである。政治体系論が動的体系の概念を基礎として政治現象を全体的に把握するものであるとすれば、それはサイバネティックス的なシステム論から多くのものを吸収しうるであろう。事実イーストンやドイツの政治体系理論にみられるように、政治現象へのシステム論的アプローチの影響は、しだいに明確にあらわれてきている。もちろん、政治学には政治学独自の事情があり、他の領域で開発された概念体系と手法の機械的適用は危険であるが、現在の政治体系論の理論的基礎をあらかじめするために、現在のところ最も具体的普遍性をもつ体系の思想を展開しているシステム論の一般的思考法を考察しておく必要がある。

二 システム論の基本的な思考法

システム論も、体系の思想のもとに、対象をたんに局限的・分析的ではなく構成的・総合的に、その全体性において把握しようとする科学的・方法的立場である。全体の論理という意味では、システム論は別段とくに新しい思考

法ではない。たとえば、ヘーゲルの弁証法論理は、一種のシステム論だといえるかも知れない。しかし、今日いわゆるシステム論はより限定された意味をもっている。すなわち、それは、対象を相互作用の複合体としてみるところの経験的・科学的分析に媒介された抽象的体系構成の論理なのである。そしてこれと関連して、ここで問題にされる体系の概念は、動的システム (dynamical system) であって、要素の論理的必然性の秩序ではなく、むしろ時間的に状態の変化する要素の因果的相互作用の機序にかかわるものである。そしてシステムは、全体としてならぬか目的をもっており、この目的の達成のために機能していると考えられる。このようにして一般に体系は、(1)構成要素、(2)要素間の相互作用と相互依存関係、(3)境界の存在と外部環境との相互作用、によって定義される (Bertalanffy, 1956; Miller, 1965)。相互作用分析の一形態ともいえるシステム論のこの側面から、次のような分析図式が生まれる。すなわち、図1の

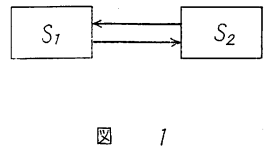


図 1

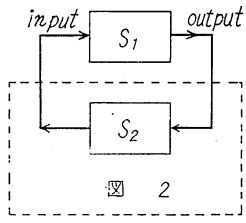


図 2

ような要素 $S_1 \cdot S_2$ の相互作用体系において、 $S_1 \downarrow S_2$ の作用は、 S_1 の S_2 に対する力の行使であり、 S_1 が S_2 に対して力を放出したものである。それゆえこれを S_1 の S_2 への出力 (output) と呼ぶ。逆に S_2 の S_1 への出力は、 S_1 からこれをみれば S_2 から S_1 のへの入力 (input) である。相互作用が時系列をなすことを考慮すれば、作用の方向を示す矢印を一方方向にそろえることが望ましいが、入力・出力が、 $S_1 \cdot S_2$ のそれぞれに備わっている入口と出口を通過すると概念すれば、これは図2のように表現される。この図式の核心は、いうまでもなく、相互作用を方向性のある流れとして把握し、さらに、要素を前後に配列づけられた内部構造をもつものと理解するところにある。システム論は、要素 $S_1 \cdot S_2$ をもシステム (上位体系) ^{サブシステム} として分析

政治体系論の基本的性格について

する。いまかりに S_1 要素を中心に於いて相互作用を観察するとき、この要素 \parallel サブ・システムからのおよび、力の出・入の区別が基本的区別にならざるをえない。その場合、 S_1 は一定の流れを処理する開放体系であり、一般的には入力への出力への変換器である。ここで S_1 が内部構造と特性が未知な対象で、 S_2 は S_1 を観測している人間だとし、 S_1 への刺戟 \parallel 入力を変化させつつそれに対する S_1 の反応 \parallel 出力を観測しているとき、 S_1 は暗箱であるといい、内部構造と特性が既知の場合、これを明箱（ホワイト・ボックス）という。このような概念図式は、システムを構成する要素のあいだの相互作用だけにではなく、システムとその外部環境とのあいだのそれにも適用されうるし、また適用されなければならない。システム論はこのように、入力 \downarrow システム \downarrow 出力という図式で相互作用の全過程を分析するが、その根底に、このような認識論的・実践論的インプリケーションがあることに注意すべきである。与えられたシステムを明箱化する手続をシステム・アナリシスといい、一定の特性を發揮するシステムを設計する手続をシステム・シンセシスという。

右のような思考法を、記号を用いて整理しておくようになる。集合 S の要素を $x_i (i=1, 2, \dots, m)$ 、要素間に存在する関連性を $R(x_1, x_2, \dots, x_n)$ とし、 A なる条件を満足する集合 B を $\{B|A\}$ で表現することとすれば、システム \mathcal{S} は、集合 $S = \{x_1, x_2, \dots, x_n\}$ と、これら要素間に存在する拘束条件 R によって、 $\mathcal{S} = \{R\}$ として表現される。 $R(x_1, x_2, \dots, x_n)$ は、たとえは、連立方程式体系

$$\left\{ \begin{array}{l} f_1(x_1, x_2, \dots, x_n) = 0 \\ f_2(x_1, x_2, \dots, x_n) = 0 \\ \dots \dots \dots \\ f_m(x_1, x_2, \dots, x_n) = 0 \end{array} \right.$$

によって与えられる。いま x_i が x_j に対して直接になんらかの影響を与えているということを $x_i R x_j$ と表現するならば、最も単純なシステム \mathcal{E}_0 は、二つの構成要素 x_a, x_b によって構成されたものであって、

$$\mathcal{E}_0 = \{x_a, x_b \mid x_a R x_b \vee x_b R x_a\}$$

である。もちろん、 x_1, x_2, \dots, x_n がサブ・システムであっても、右のような表現は容易に拡張できる。システム論で重要なのは、このシステムの階層構造と水準の問題である。

ところで、このような相互作用について、次のような因果連鎖の二重性という観点を導入することが重要である。すなわち、相互作用における物質 \parallel エネルギー・フローは、直接対象に働きかけ、これに反応を生ぜしめる部分束と、対象への働きかけを形態づける間接作用の部分束（これは通常微弱な物質 \parallel エネルギー束である）から構成されているという考え方である。このように媒介変数的作用をいとなむ微弱な物質 \parallel エネルギーのことを情報 (information) という。原則として情報フローは、直接作用の物質 \parallel エネルギー・フロー（以下、便宜的に「物質 \parallel エネルギー・フロー」という）とは別の系統をなしている。それゆえ、これら二つを異なった次元のものとして区別するのが適当である。システム論は、従来の組織論が比較的に軽視していた、この情報フローを重視するという特徴をもつのである。というのは、情報の問題は、システムの統合性と一体性に重大な関連があり、全体としてのシステム性を維持するための内部調節とコントロールは、情報のフィードバック・ループ（図3）の存在に依存しているからである (Wiener, 1961)。すなわち、システム統合化の一つの基礎は情報過程にあり、コミュニケーションの回路網構成とこれに基づく制御機構こそ、システ

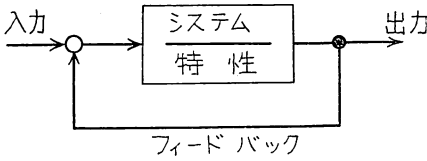


図3

ムを方向づけ、その形態を組織するものなのである。それゆえ、通信と制御の理論がシステム論で重要な位置をしめることになる。しかし、情報論的観点のみをもってシステムを規定するのは正しくない。システムを構成する他の過程、つまり物質 \parallel エネルギー・フローを忘れてはならないからである。システム論的アプローチとは、この二つの過程の立体的複合構成の全体的把握を志向するものでなければならぬであろう。

このような立体的複合構成体としてのシステムは、要するに、物質 \parallel エネルギーを処理するサブ・システムの連鎖と、情報を処理するサブ・システムの連鎖の二元的組合わせである。各々のグループについてどのような種類のサブ・システムが存在するかを識別することは、システム論にとって基本的な問題の一つであり、具体的にはシステムによって異なる要素とサブ・システムが存在するが、一般的範疇化を試みる必要がある。たとえば、J・G・ミラーは次ページの表のようなカテゴリ・セットを提出している(Miller, 1965 b)。なお、かれは、システムの環境への「適応」とシステムミックな「定常状態」の概念にフィードバックの概念を結びつけ、これを(1)内部フィードバックと(2)外部フィードバックに分けているが、この区別は必要かつ適切である。フィードバック概念は、すでにみたように、システム論の特徴的な概念だといってよいほどであるが、奇妙にシステムの内部にフィードバックが存在することが忘れられる傾向があるからである。ちなみにミラーは、フィードバックに、以上のもののほか、次のような分類をしている。(3)ゆるいフィードバック(fbと略す)、(4)かたいfb、(5)受動的適応fb、(6)入力信号適応fb、(7)極大・極小適応fb、(8)システム変数適応fb、(9)システム特性適応fb。かれの情報システムサブ・システムのカテゴリは、電子計算機の構成要素をモデルにしたものと思われるが、濾波器や増幅器などが欠けており、かならずしも完全とはいえない。同様のことは物質 \parallel エネルギーシステムのサブ・システムについてもいえよう。しかし、この種の範疇化の試みがシステム

| 物質=エネルギー系 サブ・システム | 両系統ともにかかわ るサブ・システム | 情報系 サブ・システム |
|--|---------------------------------|---|
| 1. 撮 2. 配 3. 分 4. 生 5. 蓄 6. 排 7. 動 8. 支 取 給 解 産 積 出 力 持 器 器 器 器 器 器 器 器 | 1. 再 2. 境 生 器 界 | 1. 入 2. 内 3. チ 4. デ 5. 連 6. 記 7. 決 8. エ 9. 出 力 部 ャ コ 結 記 定 ン 力 変 換 器 器 回 路 網 ダ ー 器 憶 器 コ ダ ー 器 |

論と政治体系論の発展のために重要であることは、くりかえしいうまでもあるまい。

ところで、システムをたんにサブ・システムの組合せとみるだけでは全く不十分である。問題はこれらがいかに構造的に組合わせられて全体としていかなる動作特性をもっているかである。このような角度からシステムを分析するために、これまで種々のテクニックが考案され適用されてきている。たとえば従来から組織論でよく利用されてきたフロー・チャート分析や、電気工学において用いられている回路図と回路網理論、自動制御理論における信号伝達の系統図としてのブロック線図のテクニックや伝達関数の概念、トポロジーや線型代数学の利用、電子計算機を利用したPERTやシミュレーションのテクニック、ORなどである。ここではこれらのテクニックやトゥールの問題に立ち入らないが、これらの開発は、システム論の具体化とその応用のために決定的に重要である。これは本来、数学と密接な関係のある問題領域であり、明確な数学的・論理的定式化がシステム論の一つの重要な特徴となっている。

システム論の問題領域は二つに大分される。一つは、ある与えられたシステムの構造と特性の分析である。いま一つの問題領域は、ある与えられた課題を遂行する能力をもったシステムを設計することである。これは、とくに自動制御理論では「シンセシス」の問題といわれるものであるが、一般的には「システム・エンジニアリング」の問題と

されており、そのテクニクが体系化されつつある。その最も重要なテーマはシステム最適化の問題である。

さて、以上のようなシステム論の視角から、政治体系論の展開過程を、主としてアメリカ政治学界について観察してみよう。

三 政治体系論の展開過程

政治体系論は、さきに見たように、一九五三年にイーストンによって初めて包括的な問題提起がおこなわれたものであるといつてよいであろう。しかし、この当時のかれは、この要請を具体化するために必要な政治体系の基本的ヴィジョンを、T・パーソンスの社会体系論を手がかりとしつつ摸索していた段階にあったと考えられる。もっとも、かれがすでに、政治体系理論の理想像を力学の連立方程式体系に求めていることは重要である(山川・一九六三)。

同じ一九五三年に、レーヴェンシュタインは、イーストンとは独立に、しかしかれとほぼ共通する動機から政治体系概念を構成した。かれは「政治文明の真のゲシュタルト」の認識を可能とする統一的・包括的な機能的国家理論を志向しつつ、政治体系を「ある国家社会で支配的な社会政治的現象の総体」と定義した。かれの場合特徴的なことは、政治体系における制度的要素とイデオロギー的要素の相関関係を強調し、政治体系をこの二要素の統一体と規定した点とである(Loewenstein, 1953; 山川・一九六五)。しかしかれも、より具体的な「単一の全包括的概念図式」を提出しうるためには、これまたイーストンと同じく四年後の一九五七年をまたなければならなかったのである。

この間において、レーヴェンシュタインやイーストン、とくに後者の投じた石は次第に大きい波紋を描き、政治体系論の熱心な共鳴者が何人かあらわれるようになった。たとえば比較政治学者R・C・マクリディスは、かれの同志

たちと検討してつくりあげた概念図式を一九五五年に公表した (Merzlis, 1955)。それは、(1)決定作成、(2)権力、(3)イデオロギー、(4)制度を基本的な変数としていたが、比較政治学の性質上、仮説形成に関して、強く中範囲理論(R・K・マートン)的な態度に傾いており、イーストンのいうような体系的な一般理論よりも、むしろ綜合理論の建設に導くものであった。その原因の一つは、政治体系概念の全体性および統一性(政治体系の体系性)が十分に強調されていなかったことにある。政治体系が範疇体系なし理論体系として理解されるか、あるいはそれにアクセントがおかれる場合には、このような結果になりやすいが、そもそも信頼しうる一般理論への方向づけがまだ存在しない初期段階においては、これもやむをえないことであった。政治体系概念の自覚的使用の拡大において、この時期にマクリデイスが果たした役割は高く評価してよいと思われる (cf. Dahl, 1963, p. 112)。

政治体系概念のアクセントが概念図式としてのそれから、経験的・対象的なそれへと移行していくうえで大きい功績があったのは、一九五六年に発表された比較政治学者G・A・アームンドの論文であろう (Almond, 1956)。かれは、パースンスの社会体系理論を援用しながら、経験科学の対象としての政治体系を行動の体系として明確に定義し、役割概念を鍵として分析すべきことを示した。さらに、政治文化概念を導入して、政治体系理論の発展に力強い方向づけを与えたのである。それだけにとどまらず、かれはここ一〇年間にわたって、持続的に理論的努力をかさね、政治体系理論の発展に対してきわめて貴重な貢献をしてきた(詳細については、山川・一九六六、参照)。

なお一九五六年は、政治体系理論の発展にも大きい影響を及ぼした一般体系理論運動の機関誌 "General Systems, Yearbook of the Society for General Systems Research" が創刊された年である。

一九五七年に、政治体系理論の発展史で重要な位置をしめる三つの業績があらわれた。一つはローヴェンシュタイン

の名著であり、いま一つはイーストンの論文であり、最後の一つは国際政治学者モートン・A・カプランの画期的な国際体系論である。

レーヴェンシュタインは、現代世界における人類の政治生活の相貌を分析した巨匠的な労作において、「存在論的接近方法」から三つの水準の政治体系概念を区別して使用しているが、一般的にいえば、かれの場合、政治体系は、一元的権力に対する抑止機構の解明という問題意識から、体系と制御の概念（水平的制御と垂直的制御）を鍵として分析されるところの、政治権力制御過程の立体的複合体である。ただ、かれの場合、具体的に各国の政治過程の分析

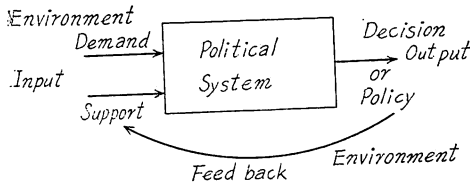


図 4

を詳しくおこなうことを主たる目的としていることもあって、政治体系の一般理論は、かならずしも明確に展開されているとはいいがたいというらみがあるが、政治体系概念の見事な一適用例を示しているというべきである（詳細については、山川・一九六五、参照）。

イーストンもこの年に、初めて実質的なかれの政治体系理論を公表した (Easton, 1957)。この論文でアウトラインを示された概念図式 (図 4 参照) は、その後、ある側面においてより精細に発展させられた形で一九六五年に改めて世に問われたが、両者を比較してみると、若干新しい考え方が入ってきてはいるが、図式の基本的な変更はおこなわれていない。イーストンは一九五七年論文では、アームوندと同じように、行動の体系としての政治体系が役割を単位として組織されていることについて語る。そして、政治体系が体系として一般的にもつべき諸特徴から演繹的に、あるいはむしろアナロジカルに政治体系の概念図式を構成しようとする。ただし、体系についてのかれの概念化は、すでに理論体系をモデルとすること

をやめ、パーソンスの行為理論からも離れており、一般体系理論の信奉者の多い、ミシガン大学精神衛生研究所の、ひととの交流に負うものであるとされている。のちにかれは、より限定的に、通信科学（複数）におけるシステム分析（systems analysis）に負うむね述べているが（Easton, 1966）、かれが体系のフロー・モデルと入力―出力図式を採用し、フィードバックを重視していること、体系の組織性と関連してエントロピーという情報理論と熱力学の術語を使用していることなどにもシステム論の影響はあらわれている。なぜイーストンが体系の通信科学的概念化にしたがったのかについては、かれのように、それが現代的な思考法だからというだけでは不十分である（Easton, 1966）。それはむしろ、通信と制御の理論とによる因果系列の二つの流れ（情報と物質||エネルギー）の立体的な把握がシステムの最も具体的一般性をもつ概念化を提供し、政治現象の体系的把握に適合していると考えられたからであろう。いずれにせよ、かれのこのモデルは、政治体系理論へのシステム論適用の輪郭を描いてみせた点で、決定的な意義を有するものであった。

なお、政治理論に対して通信理論の有する意義に政治学者として最もはやくから注目していたのは、K・W・ドイチチである（Deutsch, July 1951; Dec. 1951; July 1952; Fall 1952; 1953）。かれはサイバネティクスを提唱したN・ウィーナーとM・I・Tで同僚であった。かれの通信理論への関心は、イデオロギーと象徴過程の研究からするものであったが、その後、この視角を一般化して、かれは政治体系の明快なサイバネティック・モデルを提出した（1963）。またかれは、比較政治学と国際政治学の領域で計量データを使った重要な仕事をしているが（1960; 1961）、政治理論を電子計算機を用いて組織する問題にも興味を示してきている（後述）。

モートン・カプランの国際体系理論も、みずから認めているように（1957, p. 3f.）、やはり情報科学的なシステム

論の影響下に成立したものであって、一般理論の必要性や国際政治学に対するシステム論の適合性に対する理解も、シカゴ大学での同僚であるイーストンと共通するものをもっている。カプランは、体系、環境、入力、出力、フィードバックという概念のセットを用いるだけでなく、人格体系、国家体系および超国家体系 (supranational system) をはっきりに国際体系 (international system) のサブ・システムとして言及し、さらに、のちにアーモンドによって政治体系理論の中心概念にされる能力 (capability) 概念をも使用してさえいる。かれが国際体系の変数としてあげているのは、(1) システムの行為者間の一般的関係を記述するルール、(2) システムの変化のルール、(3) システムにおける行為者の構造的特性に関する変数、(4) 行為能力の変数、(5) 情報変数であって、これらを主として機能的な役割概念を用いて分析する。かれによると、国際体系には六つの型があるが、政治体系は政府の存在と階制的構造によって規定されるので、現在支配的な型の国際体系は、政治体系ではないということになる。政治体系理論の一般的観点からみて、興味があるのは、かれが深層心理学的な人格体系をモデルとしたシステムの制御過程の理論(とくに「付録」Iを参照)を提出していることである。その後の国際体系理論は、計量データを使用した国際体系の類型構成とシンチュレーション、およびカプランが体系理論の枠組内にくみこんだゲーム理論的戦略論の方向に発展してきているが (Singer and Small, 1965; Guetzkow, 1963; Rapoport, 1960; Richardson, 1960; Shelling, 1960 etc.)、右の制御理論は、あらためてとりあげ検討を加えるだけの独創的な価値があると思われる。

一九六〇年にはアーモンドとコールマンの共編書が公刊された。これは、五人の研究者が、アーモンドによって提示された政治体系の新しい機能論的モデルにしたがって、新興諸国の政治を比較分析したものであって、その後もつづけられたアーモンドを中心とする比較政治学者グループの努力がなければ、政治体系理論は、このようにはやくア

アメリカ政治学界に定着することはなかったであろう (cf. Almond and Coleman, 1960; Almond and Verba, 1963; Pye and Verba, 1965)。また現在のところ政治体系の内部構造の一般論としては、アーモンドの理論が最も精細であるといつてよい (山川・一九六六、参照)。カプラン、A・L・バーンズ、T・C・シェリング、R・E・クオント、J・D・シンガー、G・モデルスキールが執筆しているノアとヴァーバの共編著 (Knorr and Verba, 1961) は、国際政治学において、アーモンドらの共同研究と類似する影響力を及ぼした。

ところで、これまでのところ政治体系の理論には、二つの主要な傾向があったように思われる。一つは、情報科学の影響を強くうけたシステム論的傾向であり、一つはパーソンズの行為の一般理論の影響を強くうけた構造・機能分析の傾向である。もちろん両者を截然と区別することは困難であるし、また適当でもないが、一九六一、二年当時の段階の政治体系理論には、一般的にいえばパーソンズの社会学的理論(とくに、1951 a, b)の影響のほうが強かったと思われる。この系列に立つ研究者としては、当のパーソンズをはじめ、E・シルズ、M・レヴィ、アーモンドおよびそのグループ、S・N・アイゼンシュタット、W・C・ミッチェル、F・W・リッグス、S・ロッカシなどがある。パーソンズも入力―出力図式を用いて社会体系を分析するのであるが (cf. 1956 etc.)、かれの場合、理論的ないくつかの特徴がある。それは、行為志向と制度の規範的構造を重視すること、行為志向と型相変数の理論を一般化して構成された社会体系の機能的要件に関するAGIL理論の枠組の中にサブ・システムとしての政治体系を位置づけ、そのうえでサブ・システム間の交換過程を全体的に分析することである。最近のパーソンズは、政治学の領域で次々と業績をあげており、かれの影響力は今後も持続するものと思われる。ただ、いままでも、パーソンニアンと目される人びとにしても、かならずしもパーソンズの開発した理論に厳密には依拠せず、自由に修正を加えたり、他の理論と折

衷して使用していることが多いのであって、六〇年代に入ってから、これらの人びとをも含めて、政治体系論者に対する情報科学的システム論の影響力が次第に増大してきているように思われる。これは、現代が「情報の時代」であるということだけでなく、第二次大戦中は、まだ主として弾道計算に用いられていた電子計算機が、急速に進歩するとともに、やがて社会科学と政治学、とくに国際政治学および比較政治学で利用されるようになってくることによって、いやでも通信科学や自動制御理論と結びついた思考法の偉力を認めざるをえなくなってきたことと密接な関連があるであろう。理論的枠組としては、さきにもべたようにイーストン（一九五七年）やドイチチュ（一九六三年）のものが、この系列の代表的存在であったが、アームوندも、一九六五年一月に発表した論文で、この方向への明確な転換を示した。かれのこの論文は、政治体系の能力概念を中心にシステム論としての政治体系理論の概念体系を確立しようとしたものとして高く評価することができるが、いくつかの欠陥をもっている。それは、サブ・システム概念が活用されていないこと、構造概念が曖昧なこと、物質＝エネルギー・フローとフィードバックの概念が十分認識されていないことなどである。しかし、その大きいメリットは、政治体系理論の枠内で政治史の問題をいかに扱うかという政治体系論にとって重大な一課題に着手していることである。

最も新しい政治体系論の概念的枠組はイーストンの一九六六年論文によって与えられている。かれは、みずからの立場をシステム分析 (systems analysis) と称し、その主要テーマを「政治体系が安定性と変化の世界においていかにして存続を確保するか」という問題であり、システム分析の志向する政治体系の生命過程 (life process) と自己維持のための応答動作の分析は、政治理論の中心問題だという。行動の体系としての政治体系は、環境の中におかれ、これに**応答し**、**適応**する開放体系である。政治体系は、**社会**の一構成要素、サブ・システムであって、この社会に対し

て諸価値を権威的に配分することにかかわる相互作用から成っている。政治体系の本質的機能は、この配分機能と、体系のメンバーから正当性信念を調達する機能の二つである。環境全体は、体系の複合と理解され、この政治体系の上位体系である全体社会の内部のものと全体社会外のものに大別される。体系と環境の相互作用は、入力―出力概念を用いて整理される。入力には要求と支持という二つの主要な種類がある。出力は権威の決定と行為である。出力は環境に働きかけるが、その結果ふたたび体系に投入される。かくして、フィードバック・ループが成立し、体系の動作は、これによって制御される。環境から政治体系に作用し、これに変化を生ぜしめる影響力が及ぶが、かれはこの入力を妨害と呼び、体系の維持に悪影響を及ぼす妨害の結果生じた体系の本質的変数における変化のことを歪みと呼ぶ。歪みがある限界範囲をこえて、ある時間的範囲以上持続し、体系の応答・適応能力をこえたときは、体系は破壊されるであろう。

イーストンの右のような概念図式は、精神身体医学や材料力学で用いられる術語を思わせる妨害・負担・歪み・限界範囲・体系破壊などの概念化を除けば、五七年論文のそれと基本的に変わりはない。六五年の二冊の著書では、かれは、体系レベルで体系と環境の相互作用を扱い、とくに政治的社会化の機制的分析に精力を注いでいる。かれの業績が貴重な寄与であることはいままでもないが、若干疑問がないではない。たとえばかれのように政治体系論を狭く限定して、パーソンズやサイモンを体系論から除外していることには、わたくしは賛成できない。また政治体系の内部構造の問題についていえば、かれは、政治共同社会、政治制度、政府について言及しているが、これらについてのシステム論的なクロス・レベル分析は十分とはいえない。また、政治体系の内部構造の機能的分化についても、なすべき多くのものを残している。これまでのところではイーストンの仕事は、複合的組織構造の一般理論というシステ

ム論の重要な一特徴をかならずしも發揮していかないというべきであろう。政治体系論の基本的な視角は政治体系を暗箱として、その全体的特性を考察することである。しかし、いうまでもなく政治体系は生体のような具体的体系ではないのであって、現実には、個々の行動とその体系的連関があるにすぎない。やや逆説的になるが、かつて経済学者メンガーが述べた、社会科学においては原子こそ目に見えるものなのである、という言葉が想起されるべきであろう。行為連関の研究を通じて暗箱を明箱化するという視角がイーストンの場合、かならずしも徹底していないように思われる。入力と出力によって政治体系の特性を正しく把握するためにも、体系の内部機構について、歴大な個別的知识を蓄積することが必要なのである (cf. R. K. Merton, 1957)。これに関連して、次に政治データ処理に関する最近の動向について触れておきたい。

「コンピューター革命」は、社会科学においても、大量のデータの処理と評価において革命的な影響を及ぼしつつあるが、電子計算機システムを利用することによって、政治学でも理論の新しい地平が開拓されようとしている。

第一、政治体系の実質的な仮説体系の形成のためには、組織的に広範囲にわたる種々の調査を実施し、それによって獲得される大量のデータを整理して蓄積し、分析のために自由に索出できなければならない。おそらく政治学ほど多数の変数を考慮しなければならない科学は、ほかにあるまい。たんなる人力では、個人はもちろん、いかにすぐれたスタッフを擁している研究組織にとっても右のような能力はきわめて獲得困難である。行動諸科学間の研究協力組織の必要性の問題もそこに生じる。これはいましばらくおくとしても、データの蓄積・検索・分析については、大量の記憶能力をもつ電子計算機がきわめて有効な補助手段となってくれるであろう。計算機の使用は、知識を集中的に管理し、その稼動性を高めるだけでなく思考法の論理的厳密性と規格化を促進するという副産物があるであろう。

ともかく、システムの作動についての精密な生理学的認識の絶対的・前提条件となる知識の巨大な蓄積は、人間—機械系として、はじめて機動性を發揮しうるであろう。そしてそのさい、電子計算機を基本的ツールとして、データを管理し、運用する組織が現在のところ最も望ましいであろう。現在、アメリカでは、イェール大学 (Yale Political Data Program)、『シガン大学 (Data Survey Center)』、カリフォルニア大学 (International Data Library and Reference Service) など、有力大学や研究所は、競ってこの「政治データ銀行」設立の方向に努力しつつあるといつてよい (cf. Merritt and Rokkan, 1966)。これらのデータは可及的に計量的に表現されることがぞましい。対象の質と量の両者を把握しているのでなければ、論理的判断は完全ではないからである。政治学における計量データの利用は、投票行動研究で最もはやく着手されたが、一九六〇年ごろにはこの種のデータを用いた比較政治学の重要な業績 (Deutsch, 1960; 1961) もあらわれた。わが国では、京極純一教授の業績が注目される (1965, 10)。最近では、政治体系の因子分析もおこなわれるようになってきている (Gregg and Banks, 1965, 9)。国際体系の領域においても、D・シンガーやR・J・ルンメルなどが計算機によるデータ処理の新境地をひらきつつある (Singer, 1965; Singer and Small, 1965; Rummel, 1963; 1965)。

第二、理論構成のためには、実証的データに対するシステム論的分析を遂行し、多数の仮説を形成しなければならぬが、仮説を体系化し、さらに検証する作業に対しても、計算機は有力な補助手段となる。つまり理論のコーディフィケーションを推進するためにもそれは有効である。ラスウェルとカプランの業績 (Lasswell and Kaplan, 1951) が、手仕事によるこの種の試みの一つであるが、この複雑・巨大な仕事にとって、計算機の記憶力と論理的正確さは大いに助けになるに違いない。これと関連して、内容分析 (content analysis) にも計算機の利用が有効である (cf. North

et. al., 1965)。このような方向をめざした計算機システムとプログラムの開発も進められてくる (cf. Stone, Bales, Nannenwirth and Ogilvie, 1962)。ドイツ語は、計算機による理論の組織化の問題について一連の興味ある論文を書いている (Deutsch, Lasswell, Merritt and Nannenwirth, 1964; Deutsch and Singer, 1965; Deutsch, 1966)。

第三、理論の開発・検証および応用のために有効な方法として、シミュレーション技術が脚光をあびている。これは模擬手段による実験のことであるが、社会科学でも、小集団社会学や経営学においては、すでにかなりよくとり入れられている。軍関係で用いられる兵棋演習もその一種である。シミュレーションには、いくつかの種類があるが、複雑なものについては電子計算機(アナログ型、デジタル型)の使用が必要である。人間—機械系シミュレーションは、技術訓練を目的としてひろく利用されている。たとえば周知のように航空機や自動車の操縦・運転技術を初心者がおかすことなく習得するための機械装置(シミュレーター)が開発されている。政治学においても、適切なシミュレーションは、たんに理論の開発や検証にだけでなく、政治教育に対しても有効である。参加者は濃縮された形で、くりかえし政治のメカニズムを体験することができるからである。政治学の諸分科で、この手法に最も深い関心をいだき、実施段階に入っているのは、国際政治学の領域である (cf. Getzkow, 1962; Verba, 1964 etc.)。最近わが国でも、関寛治助教授によって、五カ国間シミュレーションが実施された(関・一九六六、参照)。

右のような状況は、かならずしも政治体系理論との明確な一体性の意識のもとに展開されているわけではない。しかし、これらを統一する理論的な枠組が必要なのであり、そのような統制原理として政治体系理論ほど適当なものはないであろう。そしてまた実際に、現在、システム論は、電子計算機を使用した、データ整理と蓄積、内容分析、理論構成、シミュレーション・モデルの開発と実施など、政治学のフロンティアのほとんど無意識な前提となる

にわたっている」といってよいであらう。

以上のような研究動向を整理して、次のような政治体系論者の分類一覧表を試みにつくってみた。横の行は、政治学での主たる活動分野、縦の列は、そのひとの体系理論の主たる背景となっている科学の専門領域である。

| | 政治学 | 社会学 | 心理学 社会心理学 | 経済学 | 基礎科学 | 一般体系理論 サイバネティクス | その他 |
|-------|-------------------------------|------------------------------|-------------------|-----------------|----------------------------------|--|---|
| 政治理論 | | パーソンズ | | ダール | | イーストン ドイッチェ | |
| 統治機構論 | | ミツエ ウオーカー ワイ | | | | | |
| 政治過程論 | | ロカン ユロー リフセツト | | | | | |
| 行政学 | | リグス ヘン | | サイモン マーチ | | | |
| 地域政治 | | ジヤノヴィツ 他 | | ダール | | | |
| 比較政治学 | レーヴェン シュタイン マクリン ビーフ | アレン ズ エクス タイン アタ | コールマン ハイ バー | | グレン クスター パン クスター | アレン ソフ | マリ ット ラセ ット |
| 国際政治学 | | モデルスキ ー | ゲツコウ | ボール ディン グ | ラズ ボート シン ガー ド ソン | カラ ン ラ ン ド マ カ リ ー マ ス ター | ル ン メ ル ノ ー ス ア ル カ ー |
| 政治変動論 | | ア ゼ ン シュ タ タ | | | | ア レ ン ソ フ | |

四 問題点と将来

現在の政治体系理論の問題点はなんであろうか。第一に、システム論的方法を徹底的に具体化した標準的な概念枠組がまだ存在していないことが最も重大であるとわたくしは考える。現在の政治体系論の主流は、システム論的思考法によっているが、これまでの多数の人びとの努力にもかかわらず、提出された諸理論はシステム論としてかならずしも徹底していないといわなければならない。それは、サブ・システム論と内部フィードバック論が十分に展開されていないことによってもあきらかである。システムに統合性を与える基礎は情報と制御の回路網であるが、その分析が不十分である。他方現在の政治体系論は、政治体系における物質||エネルギー・フローをも軽視している。政治体系をトータル・システムとして把握しない傾向があるのである。またそれは、社会における政治体系の機能と意味を十分に強調していない。これと関連して、政治体系が社会を制御する装置であるということが強調されていない。このことはまた、社会体系、経済体系、文化体系、人格体系などの政治体系の相関関係を分析することにおいて不十分であることを意味する。これらの問題は、困難な多数の問題を系としてもっており、ここでは一々とりあげることはできない。いずれにしても、システム論的思考法が貫徹された政治体系の概念図式を構築することが緊急の問題である。というのは、一九五〇年代以降におけるアメリカ政治学界の巨大なエネルギー噴射によって経験科学的政治学理論は現在いわば離陸しかかっており、それゆえにこそ体系理論の果すべき誘導の責任はますます大きいからである。電子計算機システムによるデータ処理にしても、現在は導入期であって、この時期にすぐれた体系理論が存在するか否かということは、のちに大きい差異を結果することになるであろう。

第二に、現在の政治体系論には、徹底したシステム論的志向性が与えられていないために、システム工学的問題意識をもっていない。これは実践的に重大な意味がある。政治の一般理論は、本来的には、近代自然法的政治理論にみられるように、現実世界に働きかけ、これを変革する力を有するものである。現在の政治体系論には、しかし、とうていそのような力はないだけでなく、政治過程の合理化問題に対して科学的な指針を与えることすら、満足にできないであろう。わたくしは、くりかえしているが、政治体系理論は、そのシステム論的性格に徹底し、組織体系化の一般理論を提出すべきだと考える。そこからシステム・アナリシスとシステム・シンセシスの問題がはつきり定式化され、そして社会工学の壮大な展望も開かれるであろう。

第三に、現在の政治体系論では、国際体系論の領域を除けば、政治体系を分析するツールの開発・整備・適用が全く等閑視されている。政治体系論では他の科学領域の研究者との協力が本質的に必要である。しかし政治学者が、他の行動科学や情報科学などで一般的なツールに無知であれば有効な協力は不可能である。このため、政治学者は、まず先進領域で開発されたアイデアやツールを学習しなければならないであろう。そして、これらを勇敢に政治体系研究に適用すべきである。現在までのところかなり努力が払われてきたが、ツールの吸収において努力がたりないと思われるのである。これらのツールとして最も基本的なのは数学的方法である。しかし、それだけにとどまらず、種々の工学的ツールや DeVuice (たとえば電子計算機) についての知識なども必要となるであろう。以上のような事情は、政治学教育の再検討の問題に導く。

以上の三つの問題は、政治体系論が現在対決をせまられている緊急かつ重大な方向定位の問題にかかわっている。いうまでもなく、明確にシステム論的に定位されたからといって、ただちに政治体系論の基本的問題が解決されるわ

けでななり。しかし、政治体系理論がとりなむべき実質的諸問題は、そのときなじめて最も有効な形に定式化されて提起されたのである。わたしたちは、これらとの格闘を通して、政治体系理論が、将来の政治学と政治の実践と、それぞれの間を結ぶための重要な橋を築くべきであると信ずる。

参考文献

- Ackoff, R. L., "Systems, Organizations, and Interdisciplinary Research," in: D. P. Eckman ed, *Systems; Research and Design*, 1961.
- Alker, H. R. (with Russett, B. M.), *World Politics in the General Assembly*, 1966.
- Almond, G. A., "Comparative Political Systems," *Journal of Politics*, XVII, August 1956.
- ibid., "A Functional Approach to Comparative Politics," in: Almond and J. S. Coleman eds, *The Politics of the Developing Areas*, 1960.
- ibid., "Political Systems and Political Change," *American Behavioral Scientist*, VI, 1963.
- ibid. (with S. Verba), *The Civic Culture: Political Attitudes and Democracy in Five Nations*, 1963.
- ibid., "A Developmental Approach to Political Systems," *World Politics*, XVII, 2, 1965.
- Apter, D., "A Comparative Method for the Study of Politics," *American Journal of Sociology*, LXIV 1958.
- ibid., *Politics of Modernization*, 1965.
- Ashby, W. R., *Design for a Brain*, 1954.
- ibid., "Principles of the Self-Organizing System," in: H. von Foerster and G. W. Zopf eds, *Principles of Self-Organization*, 1962.
- Banks, A. S. and R. B. Textor, *A Cross-Polity Survey*, 1963.
- Barnard, C. I., *The Functions of the Executive*, 1938. 田杉鏡監訳.

- Beer, S., "The Analysis of Political Systems," in : Beer² and A. Ullam eds., Patterns of Government, rev. ed., 1962.
- Bertalanffy, L. v., "Zu einer allgemeinen Systemlehre," *Biologia Generalis*, XIX, 1948.
- ibid., *Das Biologische Weltbild*, 1949. 飯島・長野訳
- ibid., "General Systems Theory," *General Systems, Yearbook of the Society for General Systems Research*, I 1956.
- ibid. (with A. Rapoport) ed., *General Systems, Yearbook of the Society for General Systems Research*, I, 1956 ff.
- Borke, H. ed., *Computer Applications in the Behavioral Science*, 1962.
- Boulding, K., "General System Theory: The Skeleton of Science," *General Systems*, I, 1956.
- ibid., *Conflict and Defense, A General Theory*, 1962.
- Buchanan, J. M., "An Individualistic Theory of Political Process," in : D. Easton ed., *Varieties of Political Theory*, 1966.
- Cannon, W. B., *Wisdom of the Body*, 1939.
- Coleman, J. S., "The Political Systems of the Developing Areas," in : G. A. Almond and J. S. Coleman eds., *The Politics of the Developing Areas*, 1960.
- ibid., *Introduction to Mathematical Sociology*, 1964.
- Dahl, R. A., *A Preface to Democratic Theory*, 1956.
- ibid. (with C. E. Lindblom), *Politics, Economics, and Welfare: Planning and Politico-Economic Systems resolved into Basic Social Processes*, 1953.
- ibid., "A Critique of the Ruling Elite Model," *American Political Science Review*, LXII, 2, 1958.
- ibid., *Who Governs?*, 1961.
- ibid., *Modern Political Analysis*, 1964.
- Deutsch, K. W., "Mechanism, Organism, and Society," *Philosophy of Science*, XVIII, 3, July 1951.
- ibid., "Mechanism, Teleology and Mind: The Theory of Communications and Some Problems in Philosophy and Social Science," *Philosophy and Phenomenological Research*, XII, 2, December 1951.

- ibid., "Communication Theory and Social Science," *The American Journal of Orthophichiatry* XXII, 3, July 1952.
- ibid., "On Communication Models in the Social Sciences," *Public Opinion Quarterly*, XVI, 3, Fall 1952.
- ibid., *Nationalism and Social Communication*, 1953.
- ibid., "Toward an Inventory of Basic Trends and Patterns in Comparative and International Politics," *American Political Science Review*, LIV, 1960.
- ibid., "Social Mobilization and Political Development," *APSR*, IV, 1961.
- ibid., *The Nerves of Government: Models of Political Communication and Control*, 1963.
- ibid. (with J. D. Singer), "Multipolar Power Systems and international Stability," *World Politics*, XVI, 1960.
- ibid. (with M. Kaplan), "The Limits of Coalitions, Blocs, and Federations", in: J. Rosenau ed., *Interanal Aspects of Civil Strife*, 1965.
- ibid. (with H. D. Lasswell, R. L. Merritt, and Z. Nannenwirth), *Work Progress*, Yale Political Science Research Library, 1964.
- ibid. (with J. P. Singer, and K. Smith), *The Organizing Efficiency of Theories: The N/V Ratio as a Crude Rank Order Measure*, "American Behavioral Scientist", IX, 2, 1965.
- ibid., "On Theories, Taxonomies, and Models as Communication Codes for Organizing Information," *Behavioral Science*, XI, 1, January 1966.
- Dunphy, D. C., Stone, P. J., and Smith, M. S., "The General Inquirer: Further Developments in a Computer System for Content Analysis of Verbal Date in the Social Sciences," *Behavioral Science*, X, 4, 1965.
- Easton, D., *Political System: An Inquiry into the State of the Political Science*, 1953.
- ibid., "Limits of the Equilibrium Model in Social Research," *Chicago Behavioral Sciences Publications*, No. 1, 1953.
- ibid., "A Theoretical Approach to Authority," Report No. 17 for the Office of Naval Research (Stanford, Calif.: Department of Economics, Stanford Univ., 1955)

- ibid., "An Approach to the Analysis of Political Systems," *World Politics*, IX, April 1957. 京極純一訳、『アメリカーナ』1957年10月号。
- ibid., "The Perception of Authority and Political Change," in: C. J. Friedrich ed., *Authority*, 1958.
- ibid., "Political Anthropology," in: B. J. Siegel ed., *Biennial Review of Anthropology*, 1959.
- ibid., A Framework for Political Analysis, 1965.
- ibid., A Systems Analysis of Political Life, 1965.
- ibid., "Categories for the Systems Analysis of Politics," in: Easton ed., *Varieties of Political Theory*, 1966.
- Eckstein, H., A Theory of Stable Democracy, 1961.
- ibid., "The Concept «Political System»: A Review and Revision," manuscript prepared for delivery at the 1963 Annual Meeting of the American Political Science Association, New York City, 4-7, September 1963.
- ibid. (with D. Apter) ed., *Comparative Politics*, 1964.
- Eisenstadt, S. N., *The Political Systems of Empires*, 1963.
- ibid., *Modernization, Protest and Change*, 1966.
- Etzioni, A., *A Comparative Analysis of Complex Organizations*, 1961. 納貫謙治監訳。
- Forrester, J. W., *Industrial Dynamics*, 1961.
- Goode, H. H. and Machol, R. E., *Systems Engineering*, 1957. 森口繁一他訳。
- Gregg, P. M. and Banks, A. S., "Dimensions of Political Systems: Factor Analysis of a Cross Polity Survey," *APSR*, LIX, Sept. 1965.
- Guetzkow, H., "A Use of Simulation in the Study of Inter-Nation Relations," in: Guetzkow ed., *Simulation in Social Science*, 1962.
- ibid., *Simulation in International Relations*, 1963.
- Heady, F., *Public Administration: A Comparative Perspective*, 1966.

- Heller, H., *Staatslehre*, 1934.
- Holsti, O. R., "An Adaptation of the 'General Inquirer' for the Systematic Analysis of Political Documents," *Behavioral Science*, IX, 1964.
- Homans, G. C., *The Human Group*, 1950. 馬場・早川訳.
- 石田雄, 『現代組織論』1960.
- Janda, K., *Data Processing*, 1966.
- Janowitz, M. ed., *Community Political Systems*, 1961.
- Johnson, R. A., Kast, F. E., and Rosenzweig, J. E., *The Theory and Management of Systems*, 1963.
- Kaplan, M., *System and Process in International Politics*, 1957.
- Kelsen, H., *Allgemeine Staatslehre*, 1925. 清宮四郎訳.
- ibid., *Reine Rechtslehre*, 1934. 横田喜三郎訳.
- Knoorr, K. and Verba, S. eds., *The International System: Theoretical Essays*, 1961.
- Köhler, W., *Dynamics in Psychology*, 1940. 相良守次訳.
- 京極純一・井上博子「世界各国現勢の位置づけ」外務省調査月報, 第6巻第10号, (1965, 10).
- Lasswell, H. D. (with A. Kaplan), *Power and Society: A Framework for Political Inquiry*, 1951.
- Leontief, W., *The Structure of American Economy 1919-39*, 2. ed., 1951. 山田・家本訳.
- Levy, M., *The Structure of Society*, 1952.
- ibid. ed., *Modernization and the Structure of Societies*, I, II, 1966.
- Lewin, K., *Field Theory in Social Science*, 1951. 猪股佐登留訳.
- Lipset, S. M. and S. Rokkan eds., *Party Systems and Voter Alignments*, 1965.
- Loewenstein, K., "Political Systems, Ideologies, and Institutions: The Problem of their Circulation," *The Western Political Quarterly*, VI, 1953. 三宅一郎訳. 法学論叢, 第70巻第2号.

- ibid., *Political Power and Governmental Process*, 1957, 2. ed., 1965.
- ibid., *Verfassungsgeschichte*, 1959. 阿部照哉・山川雄巳訳。
- Macridis, R. C., *The Study of Comparative Government*, 1955.
- ibid. (with B. E. Brown) ed., *Comparative Politics*, rev. ed., 1964.
- Malcom, D. G. ed., *Report of Systems Simulation Symposium*, 1958.
- Malinowski, B., *A Scientific Theory of Culture*, 1944. 姪岡・上子訳。
- Mannheim, K., *Man and Society in an Age of Reconstruction*, 1940.
- Masters, R. D., "A Multi-Bloc Model of the International System," *APSR*, LXV, 1961.
- ibid., "World Politics as a Primitive Political System," *World Politics*, XVI, 4, 1964.
- McClelland, C. A., "Systems Theory and Human Conflict," in: McNeil ed., *The Nature of Human Conflict*, 1965.
- ibid., *Theory and International System*, 1966.
- McNeil, E. B. ed., *The Nature of Human Conflict*, 1965.
- Mckeen, R. N., *Efficiency in Government through Systems Analysis*, 1958.
- Merritt, R. L., "Systems and the Disintegration of Empires," *General System*, VII, 1963.
- ibid., "Distance and Interaction among Political Communities," *General System*, IX, 1964.
- ibid. (with S. Rokkan) ed., *Comparing Nations: The Use of Quantitative Data in Cross-National Research*, 1966.
- Merton, R. K., *Social Theory and Social Structure*, rev. ed., 1957. 森兼吾他訳。
- Miller, J. G., "Toward a General Theory for the Behavioral Sciences," in: L. D. White ed., *The State of Social Sciences*, 1956.
- ibid., "The Individual as an Information Processing System," in: W. S. Field and W. A. Abbott eds., *Information Storage and Neural Control*, 1963.
- ibid., "Information Input Overload," in: M. C. Yovits, G. T. Jacobi, and G. D. Goldstein eds., *Self-Organizing Systems*, 1962.

- ibid., "Living Systems: Basic Concepts," *Behavioral Science*, X, 3, 1965 a.
- ibid., "Living Systems: Structure and Process," *Behavioral Science*, X, 4, 1965 b.
- ibid., "Living Systems: Cross-Level Hypotheses," *Behavioral Science*, X, 4, 1965 c.
- Mitchell, W. C., *The American Polity: A Social and Cultural Interpretation*, 1963.
- Modolski, G., "Agraria and Industria: Two Models of the International System," in: Knorr and Verba eds., *International System*, 1961.
- ibid., *Comparative International Systems*, "Worlds Politics, XIV, July, 1962.
- 南雲仁一編『バイオネツクス』1966.
- 南雲仁一・有本卓「システム理論入門」*数理科学*, 1965年11月号.
- 中辻卯一「システム研究について」*関大商学論集*, 第7巻第5号 (1962).
- Neumann, J. v., (with O. Morgenstern), *Theory of Games and Economic Behavior*, 1. ed., 1943.
- North, R. C. et. al., *Content Analysis: A Handbook with Application to the Study of International Crisis*, 1963.
- Pareto, V., *The Mind and Society*, 1935.
- Parsons, T., *The Social System*, 1951a.
- ibid. (with E. Shils) eds., *Toward a General Theory of Action*, 1951b. 永井道雄他訳.
- ibid., *Essays in Sociological Theory*, 2. ed., 1954.
- ibid. (with N. Smelser), *Economy and Society*, 1956. 富永健一訳.
- ibid., *Structure and Process in Modern Societies*, 1960.
- ibid. (with Shils and Naegel) eds., *Theories of Society*, 1961.
- ibid., "On the Concept of Influence," *Public Opinion Quarterly*, XXVII, 1963.
- ibid., "On the Concept of Political Power," *Proceeding of the American Philosophical Society*, 1963.
- ibid., "The Political Aspect of Social Structure and Process," in: D. Easton ed., *Varieties of Political Theory*, 1966.

- Popper, K. R., *The Open Society and Its Enemies*, Vol. I, II, 1945.
- ibid., *The Poverty of Historicism*, 1957. 久野・市井訳.
- Pye, L. W. and Verba, S. eds., *Political Culture and Political Development*, 1965.
- Ranney, Austin ed., *Essays on the Behavioral Study of Politics*, 1962.
- Richardson, L. F., *Arms and Insecurity*, 1960.
- Riggs, F. W., "Agraria and Industria: Toward a Typology of Comparative Administration," in: W. J. Siffin ed., *Toward the Comparative Study of Public Administration*, 1957.
- ibid., "International Relations as a Prismatic System," in: Knorr and Verba, eds., *The International System*, 1960.
- ibid., *Administration in Developing Countries: The Theory of Prismatic Society*, 1964.
- Robson, C. B. "Der Begriff des Politischen System," *Kölnher Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 17. Jg, 1965.
- Rokkan, S. ed., *Approaches to the Study of Political Participation*, 1962.
- ibid., "Zur Entwicklungssoziologischen Analyse von Parteiensystemen: Anmerkungen für ein Hypothesisches Modell," *Kölnher Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 17 Jg. 1965.
- Köhler Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, 17 Jg. 1965.
- Rummel, R. J., "Dimensions of Conflict Behavior within and between Nations," *General Systems*, VIII, 1963.
- ibid., "A Foreign Conflict Behavior Code Sheet," *World Politics*, XVIII, 2, Jan. 1965.
- ibid., "The Dimensionality of Nations Project," in: Merritt and Rokkan eds., *Comparing Nations*, 1966.
- Russett, B. M. (with H. R. Alker, Jr., K. W. Deutsch, and H. D. Lasswell), *World Handbook of Political and Social Indicators*, 1964.
- ibid., *Trends in World Politics*, 1965.
- Schannon, C. E. and Weaver, W., *The Mathematical Theory of Communication*, 1949.
- Schelling, T. C., *The Strategy of Conflict*, 1960.
- 関 寛治「国際体系におけるシミュレーション研究の基礎」*法学新報* 第71巻第2号, 1964.

同上「国際体系のシミュレーション——日本における二つのパイロット・ランの結果について」国学院法学, 第3巻第4号, 1966.

同上『現代東南アジア国際環境の成立』1966.

Shils, E. (with T. Parsons), Values, Motives, and Systems of Action," in: T. Parsons and E. Shils eds, *Toward a General Theory of Action*, 1951.

ibid., "Political Development in the New States," *Comparative Studies in Society and History*, II, 4, 1960.

清水幾太郎編訳『社会科学におけるシミュレーション』1965.

Simon, H., *Administrative Behavior*, 1947, 2. ed., 1957. 松田・高柳・二村訳.

ibid., *Models of Man, Social and Rational: Mathematical Essays on Rational Human Behavior in a Social Setting*, 1957.

ibid., *The New Science of Management Decision*, 1960. 坂本藤良・NRC監訳.

ibid., "The Architecture of Complexity," *Proceedings of American Philosophical Society*, 1962.

Singer, J. D., "The Relevance of the Behavioral Science to the Study of International Relations," *Behavioral Science*, VI, Oct. 1961.

ibid., "The Level of Analysis Problem in International Relations," in: Knorr and Verba eds, *The International System*, 1961.

ibid., "Inter-Nation Influence: A Formal Model," *APSR*, LVII, 1963.

ibid. (with R. C. Angell), "Social Values and Foreign Policy: Attitudes of Soviet and American Elites," *Journal of Conflict Resolution*, VII, 1964.

ibid. ed, *Human Behavior and International Politics*, 1965.

ibid. (with M. Small), "Composition and Status Ordering of the International System: 1815-1940," *World Politics*, XVIII, Jan. 1966.

ソスターム研究会編『経営ソスタームの研究』1964.

Snyder, R. C., "A Decision-Making Approach to the Study of Political Phenomena," in: R. Young ed, *Approaches*

- to the Study of Politics, 1958.
- Southall, A., "A Critique of the Typology of States and Political Systems," in: Political Systems and the Distribution of Power, A. S. A. Monographs 2, 1965.
- Verba, S., "Simulation, Reality, and Theory in International Relations," World Politics, XVI, Apr. 1964.
- ibid., "Comparative Political Culture," in: Pye and Verba eds., Political Culture and Political Development, 1965.
- Stone, P. J., Approach to Content Analysis: Studies Using the General Inquirer System, 1963.
- 内山秀夫『『政治体制』論の展開』法学研究, 第39巻第1号.
- Walke, J. C., Eulau, H., Buchanan, W., and Ferguson, L., The Legislative System, 1962.
- 綿貫謙治『現代政治と社会変動』1962.
- 同上『組織構造と組織分析』青井・綿貫・大橋『集団・組織・リーダーシップ』1962, 所収.
- 同上『現代日本の政治と社会』1966. 遠藤湘吉編『戦後日本の経済と社会』別冊.
- Whitehead, A. N., Process and Reality, 1929.
- Wiener, N., Cybernetics, 2. ed., 1961. 池原止戈夫他訳.
- ibid., The Human Use of Human Beings, 1950. 鎮目恭夫訳.
- ibid., I am a Mathematician, 1956. 鎮目訳.
- ibid., God and Golem, Inc., 1964. 鎮目訳.
- Wiseman, H. V., Political Systems: Some Sociological Approaches, 1966.
- 山川雄巳『秩序の問題』関大法学論集, 第11巻第3・4・5合併号(1962, 3).
- 同上『米国における政治学の現代的展開』同上誌, 第12巻第2・3合併号(1963, 2).
- 同上『政治体系の概念(一)』同上誌, 第13巻第3号(1963, 11).
- 同上『K. ローヴェンソンの政治体系理論』同上誌, 第14巻第4・5・6合併号(1965, 2).
- 同上『機能的政治体系理論の一断面』同上誌, 第15巻第4・5・6合併号(1966, 3).